

「ある婦人のいやし」（ルカによる福音書一三章一〇～二一節）

1 ある安息日に

安息日、会堂、そしていやし。しばらく目にしなかった言葉、そして出来事が、今日の箇所に出て来ます。こうしたことが記されるのは、イエスがガリラヤを去ってから（九・五一）、ここがはじめてです。

その意味で、今日の箇所を読むと、なつかしいような、何かほっとするような気がします。エルサレムへと向かうイエス、この時もイエスは、かつてのように、安息日には村々、町々の会堂で礼拝をし、そこを教えの場としていた。私どものよく知っているイエスがそこにおられます。

実際、ここでの働きは、ガリラヤでの働きをそのまま思い起こさせるようなところがあります。

例えば、思い起こしていただきたいのは、ルカ六章にあった、安息日に会堂で右手の萎えた人をいやしたという出来事です（六く一一節）。あそこでも、今日の箇所の問題になったような、つまり安息日に癒やしをしていいのか、というようなことが問題になりました。問題にしたのは、律法学者たちやファリサイ派の人々でした。そして、この一件をきっかけにして、両者の対立は、のっぴきならないものになったのです。

同じようなことが、今日の箇所でも問題になっています。ただ違いもあります。今日の箇所には、律法学者やファリサイ派の人たちは出てきません。それに代わる人として、「会堂長」というのが出て来ます。そして律法学者たちやファリサイ派の人々と、だいたい同じように立場に立って、後で申しますけれど、掟を破ったとしてイエスに「腹を立て」、間接的に非難しています。

違いをもう一つ上げるとすれば、「群衆」の存在です。ルカ六章では群衆に対する直接の言及はありません。しかし今日の箇所には出て来ます。一七節にこう書いてあります。

群衆はこぞつて、イエスがなさった数々のすばらしい行いを見て喜んだ（一七節）。

会堂長はイエスに腹を立て非難しますが、群衆は、ここにあるように、会堂長がイエスの違反をアピールしようとしたのですが、最後のところ、イエスのしたことを「すばらしい行い」として喜び、受け入れています。

こうして見ると、ガリラヤを去りエルサレムに向かう中、メシア（＝キリスト）であるイエスの福音の宣教、その働きは、やはり前進していると言ってよいように思えます。

そのように前進していることを、じつは聖書自身が、証しているのです。今日の箇所の後半、一八節からのイエスの教えは、「そこで」（「それゆえ」英訳）という小さな言葉からはじまっています。安息日の出来事を受けています。聖書は、安息日

に起こった一人の婦人の癒やし、それを、「神の国」(一八、二〇節)という言葉で受けとめようとしています。神の国が来ている。婦人の癒やしは福音の前進、神の国の広がり、証しだと理解しているのです。聖書は私どもにも、そのように受けとめるよう呼びかけています。

2 神の国とは

そこで「神の国」について、今日の箇所を理解するために、少し申し上げておくことにします。聖書では、「御国」、「天の国」という言葉も使われますが、ルカではほとんどがこの神の国です。

この場合の「国」というのは、ご承知のように、特定の領土を指すものではありません。私どもの聖書のうしろに用語解説があります。そこには、「場所や領土の意味ではなく、神が王として恵みと力をもつて支配されること」と説明してあります。聖書では、支配の意味です。「神の国」とは、神が王として治め、支配していることを意味します。

神が王であることは、イスラエルの、旧約聖書の基本的な信仰です。この王以外に王はないのです。神は、見えないけれども、この世の王とは異なる、まことの王であるのです。そのことを歌っている詩編があります。その詩は、「君侯に依り頼んではない。人間には救う力はない」と述べながら、こうつぶんでいます。

とこしえにまことを守られる主は、虐げられている人のために裁きをし、飢えて
いる人にパンをお与えになる。主は捕らわれ人を解き放ち、主は見えない人の目
を開き、主はうずくまっている人を起こされる。主は従う人を愛し、主は寄留の
民を守り、みなしごとやもめを励まされる。しかし主は、逆らう者の道をくつが
えされる。主はとこしえに王。シオンよ、あなたの神は代々に王。ハレルヤ(一
四六・五〜一〇)。

「王」という称号、そしてその国、その「支配」という言葉は、私ども神を知らないかぎり、権力の行使、あるいは抑圧といった言葉と結びつけて理解されることになりがちです。

しかし支配を、そうしたものとしてだけ理解することが正しくないことは、この詩編に明らかです。

とこしえの王である神のその支配は、イスラエルの民の虐げられた者、貧しき者、寄る辺なき者への配慮にこそ表れているのであり、反対に、逆らう者たちの道はくつがえされ、裁かれるほかないと歌われています。

こうした詩編に日頃親しんでいた、一二弟子だけではない、イエスに従っていた人たちは、旧約聖書の王としての神の描写に、きつとイエスを重ねて見たに違いありません。その言葉において、そのわざにおいて、イエスは、まさにイスラエルの神ご自身であったのです。イエスも、貧しい者、弱い者、病める者、悪霊につかれた者、あるいは徴税人、罪人など、さげすみを受け、ユダヤの民の交わりから疎外されていた

者たちを顧みられたからです。イエスは神の子、メシア、この方において、神の国は明らかに成ったのです。

この神の国について、当時のユダヤ教、ユダヤ人の間では、一般に、あくまで将来的なものとして理解され、待望されてきました。イエスの考えの中にも神の国を未来のことと考えることが残っています。しかし同時にイエスは、神の国は近づいた、いやすでに來ている、現在のことだと語られたのです。すでに次のような聖句を私も読んでいます。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」（一・二〇）。当時のユダヤ教の中ではまったく異例のことだったに違いありません。なぜならそれは、ただひとりイエスだけが語りうる言葉だったからです。

こうして考えれば、先ほど申しましたように、一八節の「そこで」という言葉が重要になります。聖書はこれを継ぎ目として、癒やしの出来事を、神の国の到来、その広がりとして受けとめたのです。その意味で今日の聖書箇所は二一節まででなければなりません。

3 十字架と神の国

さて、そこで改めて、今日の前半、聖書が、神の国の出来事として示した、一人の婦人の癒やしのことを見てみたいと思います。

イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、その上手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した（一二―一三節）。

ここでいやされた一人の婦人、一八年も腰が曲がったままだったというのです。身体的だけでなく、精神的にも身を屈（かが）めて、まことに困難な人生を歩まざるをえなかった人です。でも彼女は、会堂の礼拝に來ていた。イエスとの出会いが準備されていた。彼女の信仰のことは語られていませんが（八・四八参照）、神への信頼を見ることができるようになります。実際、癒やされて、腰がまっすぐになって、彼女が最初にしたことは、神を賛美することでした。

「病気は治った」（一二節）というイエスの言葉の「治った」に注意していただきたいと思います。もとの意味は、「解放されたれている」という意味です。彼女は、まるで悪霊のようにつきまとう病から解放されたのです。この解放は、たんに身体的なものだけではない。そのところが解放されたれ、彼女は安息と平安のうちを生きることが許されたのです。

この箇所を見ると、彼女がイエスに近づいたわけではありません。イエスが婦人に眼差しを注いだのです。

イエスは、彼女を「見て」、「呼び寄せ」られます。しかし彼女に悔い改めを迫るというようなことではありませんでした。がんばるようにと励ましを与えるためでもありませんでした。あなたは神の民の一人であるがゆえに神の民の一人として生きる

ようにということですが。

ところで今日の聖書箇所には、もう一人解き放たれて、神の国に生きることを求められている人がいます。会堂長です。

会堂長の目に、この腰の曲がった女性が見えなかったわけではありません。それでも、イエスのいやしを非難せざるをえなかったのは、会堂長が、まさに掟に縛られていたからです

掟によれば、安息日には働いてはいけない、原則として病気を治すようなこともしてはいけないのです。ただ命にかかわるような場合にはそうしてもよいということがあり、会堂長もそれは十分に知っていました。というのも、同じ安息日の規定の下にある家畜は、牛やロバは、飼い葉桶から「解いて」飲ませることをしていたからです。まして人間が、そのような扱いを受けない、つまり、命を維持し、苦しみを除いてあげることをしてならないことはないからです。そんなこと百も承知の会堂長は、それでも、なぜ、イエスが、婦人を癒やしたことをとがめたのでしょうか。イエスの言葉から、それを考えてみます。

この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか（一六節）。

「十八年もの間」という言葉で、イエスは、その病が長い年月であったことを強調しています。しかも彼女も同じ神の民の一員、仲間なのです。根本問題は会堂長の同情心の欠如です。

しかしこのイエスの言葉は、叱責の言葉であるだけでなく、悔い改めと招きの言葉でもあるようにも私には聞こえます。

「解いてやるべきではなかったのか」。この「べきではなかったのか」、解いてやることに神の御心があったのではないのか、という問いかけです。どうす「べき」かは、会堂長もイエスの「反対者たち」も分かっていた、だからイエスはそういう言い方を、会堂長にしたのではないのでしょうか。

そうす「べき」ことは、彼らも分かっていた。その証拠に、彼らはイエスに言われて「皆恥じ入って」います。でも、彼女のために何もしなかった。そこに会堂長の罪があります。「恥じ入る」ことは必ずしも悔い改めではありません。彼が隣人への同情を神に迫られながら、素直に従わず、背いた、そこに罪があります。それを認めるなら、それは悔い改めになるのです。恥じ入ること（後悔）が真の悔い改めをもたらす時もあるのです（コリント二、七・一〇）。

もし神の国の民として生きる、いわばその市民として、歩みはじめたいというのならこの罪が清められなければならない。私どもが、イエスの招きを受けて、神の国にあずかるためには、私どもの罪が清められなければならない。それゆえ、イエスの十字架がなければ、それを信じ受け入れることがなければ、人は神の国に生きることはできない。自らの罪の赦しをイエスの十字架と復活に見いだし、神の招きに従うときは神の国に生きることが許されるのです。

（二月一三日）